

くじけない、あきらめない心

上うえ廣ひろ榮えい治じ

「今でも、あの夏の夜明けの感動がよみがえる」という人にはしばしば出会います。

リードを許しながら試合終了間際に追いつき、延長戦でも先制されながらタイムアップ寸前に同点ゴールを上げ、ついにPK戦にもつれ込んでの勝利。ドイツで開催された、サッカーの女子ワールドカップ（W杯）の決勝戦のことです。

世界ランキング一位のアメリカチームにとって、あれほど悩ましい試合展開はなかったでしょう。あの試合まで、アメリカは日本と二十四回戦い、一度も敗まけたことはありませんでした。

延長戦でもリードされ、残り時間もわずかとなったとき、「なでしこジャパン」もここまでか、でもよくやったと、あきらめかけた人は少なくなかったはず。ところが、宮間選手と澤キャプテンの劇的な連携プレーで、また土壇場で追いついたのです。その精神力には、誰もが脱帽せざるをえませんでした。

しかも、驚異的な粘りでPK戦に臨むことになった「なでしこ」の円陣には、佐々木監督や選手たちの試合を楽しむ爽やかな笑顔がありました。

ゴールキーパーとキッカーとの対決では、海堀選手が見事な反応で二本のシュートを止め、逆にアメリカを追い詰めました。四人目のキッカー熊谷選手のシュートがネットを揺らした瞬間、フランクフルトの会場は、これまでにないタイプの本拠者を祝福する興奮に包まれました。

金色の紙吹雪が舞う中、優勝トロフィーを掲げた「なでしこ」たちは、くじけず、あきらめず、ひたすら前へと進む精神力の大切さを、改めて私たちに思い出させてくれたのでした。

その数日後のことです。とある喫茶室で、常連と思われる年配の男性が、マスターに話しかけているのを耳にしました。

「最後の選手がPKを決めたとき、涙が止まらなくなっちゃったよ。ほんとうに、よくやったね」。これが、ゲームを観たほとんどの人たちの素直な感想だったのではないのでしょうか。

たしかに春以来、私たち日本人は、遅々として進まない震災の復興と、日を追って明らかになる放射能汚染に、鬱々とした日々を送っていました。その気鬱が一瞬にはじけ、思わず手をたたき、拳を突き上げたくなるような高揚を、心の底から感じたのです。

彼女たちの何が、私たちをあれほどまでに感動させたのでしょうか。

それは、身長も体重も大人と小人ほど違いながら、ひるまず果敢にボールを取りに行く彼女たちの勇氣もあつたでしょう。また、その小さな身体を生かして、相手をおかわしていく小回りのよさ、俊敏性もあつたでしょう。早いパス回しを可能にする、日ごろの練習で磨き抜かれたチームワークのよさもありました。グリープから決勝トナメントへと、試合ごとに成長していくチーム力もありました。そして、ラフプレーを封印し、審判の判定に深く従う、フェアプレーの清々しさもありました。

これらすべてが渾然となつて、最後まであきらめず、ひたむきにボールを追い、ゴールを目指す姿が、観

る者の感動を呼んだのです。彼女たちの見せたチームワークと精神力が、東日本大震災の被災地の人々が見せた心の強さと他を思いやる優しさに、通じるものを感じた人は多かつたでしょう。

準決勝戦で、目の覚めるようなループシュートを決めてスウェーデンを下したあと、川澄選手は、「なでしこのチームワークとひたむきさが、観る人にも伝わっていたらうれしい」と語り、守備で活躍した岩清水選手は、「イングランド戦に敗けて気づいたことを、決勝トーナメントで生かせた」と言います。

完敗した試合のビデオを選手全員で見直し、意見を出し合い、身上とする早いパス回しがおろそかになっていたことを確認し合って修正し、決勝トーナメントに臨んだということです。

この「くじけない」「あきらめない」を絵に描いたような精神力と、それを支えたチームの「和」、失敗に学んで即実践する「気づき即行」。我が会が目指す実践の理想を、彼女たちはサッカーのゲームで示してくれたのです。

昨年の夏、南アフリカで開催されたサッカーの男子ワールドカップでも、日本代表チームは私たちを驚かせる活躍をみせてくれました。日本チームのキャプテンを務めた長谷部選手は、その著書「心を整える。」で次のように語っています。

グループリーグ初戦の試合前、闘莉王トウリウ選手から「国歌斉唱のときに、みんなで肩を組みたい」と提案があった。それを先発の選手みんなに伝え、監督にベンチでも肩を組んでもほしいとお願いした。こうして、会場に「君が代」が流れたとき、ピッチに立つ選手と、ベンチにいる選手とスタッフ全員が、気持ちを一つにすることができた。あのとときほど劇的にチームの雰囲気が変わった経験は初めてだった、と。

また、ゴールが決まったたら、得点者は自軍ベンチに駆け寄って控えの選手たちと喜びを分かち合おうと、先発の選手同士で約束したともいいます。ベンチの選手たちが声をからして応援したことは言うまでもあり

ません。

グループリーグを突破し、決勝トーナメントに駒を進めた日本チームの活躍は、このような、互いに助け合おう、互いを尊重し合おう、人の喜びを我が喜びとしようという精神に支えられていたのです。

そのW杯でひとときわ目立つ活躍をみせた長友選手は、イタリアの名門チーム、インテル・ミラノに移籍したあと、テレビの取材に次のように語っていました。

スター選手が集まるインテル・ミラノに移ってからは、それまでのようには試合に出られなくなり、不振が続き、メディアでも酷評されて大いに悩んだ。そのとき、いま自分はピッチの上で「感謝」と「仕合わせ」を感じられているか、自問した。感謝と仕合わせを感じられるようにプレーをしよう。うまくいかないときこそ、その壁を突破して上にいけるチャンスだ。そう思うことで気持ちに余裕が生まれ、周囲がよく見えはじめて、プレーも高い評価を得られるようになった、というのです。

長友選手は今あることに感謝し、「現実を大肯定」することから出発して、「苦難を福門」としたのです。さて、今年の夏の話に戻ります。決勝トーナメントの初戦、ドイツ戦の前のミーティングで、佐々木監督は選手たちに東日本大震災の映像を見せて、「本当に苦しいときには、被災地の人々を思って踏ん張れ」と伝えたといえます。被災地の人々を思うことで、選手たちは耐える力、折れない勇気をもらう。そして、被災した人々も私たちも、「なでしこ」たちのひたむきな闘志から、これからの長い復興を支える勇気と、苦難の日々を生き抜く元気をもらう。

スポーツ選手と、それを応援する人々との間に生まれた、互いに励まし合い応援し合う関係。スポーツのあり方として、これ以上のあり方が考えられるでしょうか。

この夏、私たちは、ひたむきに生き貫く勇気と元気を「なでしこ」たちから、確かにもらったのです。